NO. 55. 2000. 1. 31.

「臨界事故被曝」の大内さん逝く！

<ジトーミル消防署にある
事故処理作業者の慰霊碑の前で>

ＪＣＯ東海事業所の臨界事故で被曝した大内さんが、昨年12月21日、83日間の闘病もむなしく逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。日本の原子力開発史上初めて、被曝事故との因果関係をハッキリ認められた犠牲者が発生したことになります。

この訃報は遠くウクライナにも伝えられ、ジトーミルからは、「原子力の犠牲になった大内さんの死を、あなた方とともに悲しみます。もしもできるならば、彼の家族に私達の同情をお伝えください。」というメッセージが届きました。

あのチェルノブイリと日本が、被曝者の慰霊碑を通して一つの糸で結ばれたのです。

大内さんの治療にあたった東大医学部付属病院の担当医師は、「現在の原子力防災体制は、人命軽視がはなはだしい。安全対策の遅れに憤りを感じる。」と、厳しく原子力行政について批判をしました。

ミレニアム「新千年紀」を迎え、プルサーマル計画（プルトニウムを燃料として使用する計画）が延期されたり、巻町の町長選挙で、町民が再び「反原発」を選択するなど、多くの人々が、原子力の推進に対して、心の底から 「NO！」 と叫び始めました。 （J）

〒466−0822 名古屋市昭和区楽園町137 1−10
チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明
郵便振替 ：00880−7−108610
TEL／FAX：052−836−1073（月・水・金 10：30〜15：30）
E-メール ：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

カード・ミルクキャンペーンへのご協力、ありがとう

「東海村の放射能漏れという恐ろしい事故があり、チェルノブイリは他人事ではありません。」「今年は東海村臨界事故という恐ろしい事故が起き、多くの方々が放射線の脅威にさらされてしまいました。」……送られて来たカードにそんな言葉が添えられていました。去年の暮れ、チェルノブイリの子ども達にカードを書きながら、多くの方々がやり切れぬ思いにとらわれていたことでしょう。そして、前にも増して、二度とこの様な事故が起きぬ事を願い、チェルノブイリの子ども達を想ってカードを送ってくださった事と思います。

そんな心のこもったカードが、事務所に854通も寄せられました。他に、折鶴・リース・くす玉・絵画など手作りのぬくもりがいっぱいでした。それらの発送準備をしながら、私達まで暖かな思いにつつまれました。

これらのカードは、12月20日の航空便で、ウクライナ・ジトーミルの移住基金に送られました。その後、移住基金から「ちょうどクリスマス・イヴにクリスマスカード2箱が届きました。本当にありがとうございます。私達の子ども達に、こんな素敵なクリスマスプレゼントを作ってくれた総ての日本の皆さんに感謝いたします。」というメッセージが届きました。これらのカードは、移住基金のメンバーによって、小児病院・孤児院・学校などの子ども達に届けられたということです。厳しい寒さの中で過ごすウクライナの子ども達の心に、きっと暖かな灯がともったことでしょう。本当にありがとうございました。

'99 ミルクキャンペーンを終え、今年もチェルノブイリの子ども達にたくさんのミルクを贈る事ができるようになりました。暮れのキャンペーンはもとより、一年を通じて「ミルクカンパ」は途絶える事なく寄せられました。283 件の個人・団体の方々から、7,558,513 円もの寄付をいただきました。2 月には、この中から 450 万円を送金し、現地でミルクを購入、州立小児病院・市立小児病院・事故処理作業者の子ども達などに配られます。病院では大切に保管され、病院で治療を受ける子ども達に与えられます。また、一部は遺伝学センターで治療を受けるフェニールケトン尿症という難病の子ども達のための、特殊ミルク購入のために使われます。

寄付をお寄せくださった皆様、本当にありがとうございました。　（山盛）

“行ってきます ウクライナへ”

大谷 早苗

「 ぼくはとつぜん確信がもてなくなる。記憶していたほうがいいのか、それとも忘れてしまったほうがいいのか？ 知人たちに聞いてみた。ある者は忘れてしまったといい、ある者は思い出したくないという。なにも変わることはできないし、ここをはなれることもできないのだからと…。」 （「チェルノブイリの祈り」から）

チェルノブイリの原発事故を忘れたくても忘れられない。そこに住み続けなければならない人たちがいる限り、「チェルノブイリ救援・中部」は被災者のために色々なかたちで救援活動を続けています。今回２月 11 日～20 日に専門家派遣というかたちで現地を訪問することもその一つです。これまで送った医療機器（特に昨年送った麻酔器）の状況の調査、事故処理作業員の社会的状況の調査、さらには、障害者協会の組織や運営がどのようにされているのか等、今後の救援活動の方向性をさぐるのが目的です。

昨年 12 月の運営委員会で具体的な事が話し合われ、訪問団の一人として私に声がかかりました。「一度は行ってみたい。私たちが 10 年来救援活動を続けている現地をこの目で見てきたい。」というのは、私の念願でした。ところが、いざ声がかかってみると、私に責任がはたせるのだろうか、その上この季節、凍てつく寒さを経験した事がありません。荷物は、などなど考えると、とても喜んで行きますとはいえません。あれこれ思いながら、夜もねむれない日が続きました。

でもせっかくの機会です。現地をこの目でこの足で実感して、今後の活動の糧にしたいと思います。

代表団メンバー紹介

田中良明：「救援・中部」代表
大谷早苗：「救援・中部」運営委員（大垣）
北野達也：臨床工学技師
金子　透：写真家（自費参加）

ー訪問目的ー

（その１）これまでに送った医療機器の活用状況とメンテナンスの状態のチェック。この結果は郵政省へ報告されます。

（その２）事故処理作業者の社会学的調査。この結果は外務省に報告されます。

（その３）次年度の予算に関する話し合い。

田中代表以外の３名は初めてのウクライナ訪問です。

＜州立小児病院にて（'99.2.16.）＞

チェルノブイリ救援・中部の皆様へ！　…奨学生からのメッセージ…

チェルノブイリ救援・中部のすべての皆様、メリークリスマスと新年おめでとうございます。私たちは、皆様が幸せですべての願いがかない、ご健康でありますよう祈っています。2000年には皆様にお会いしたいです。この機会をかりて、教育大学と医学学校の学生であり、あなた方の奨学金の受領者である私たちは、私たちに心をかけてくださることに対し、あらためて感謝申し上げます。私たちはあなた方の高い信頼に、勉学と将来の仕事によって応えたいと思います。私たちの親に代わってお礼申し上げます。彼らにとって、あなた方の奨学金はかけがえのない助けです。どうか、私たちの祝福と学校の上層部からの温かい祈りをお受けください。

Domo arrigoto!

“素敵な夏をありがとう”

～ オデッサからの手紙（抜粋）

親愛なるしげのさん。私たちの子ども達へのご支援、組織的な活動、本当にありがとうございます。5,000 ドルで、黒海の海岸にある子ども用ペンションの施設利用券を 36 枚購入しました。児童用 33 名、同伴者用 3 名分です。7 月 19 日に 18 日間の予定で黒海に出かけます。（中略）

10 年前、今と同じ太陽の輝いていた夏、しげのさんから手紙が送られて来ました。封筒には小さな紙で作られた折り鶴が入っていました。私は折り鶴に口づけをして、涙を流しました。子ども達も折り鶴の羽をなでて、接吻をしました。魔法の折り鶴は、私達にお伽話のような「日出づる国」に通じている魔法の扉を開けてくれました。その国にはすばらしいしげのさんがおり、沢山の心美しい人達がいる。その人達と仲の良い友人になったのです。

8 月 6 日の《平和の日》をペンションで過ごします。私は《この子たちの夏》を持っていき朗読します。子ども達は、核のない世界を実現する闘士にならなければなりません。ノーモア・ヒロシマ！ ノーモア・チェルノブイリ！ ‘99.7.15 ニーナと生徒達

レーナ、イーラ、オーリャ、サーシャ、ヴィタリー
ジェーニャ、ナージャ 、インナ、ミコラ、ヴィーチャ
ジーマ、ポール、ヴィタリック、アンドレイ…

今日は、しげのさん！お友達の皆さん！私達はもう 1 週間も子ども専用ペンション<夜明け>で暮らしています。ここでは 400 人の子ども達が保養しています。

毎日、私達は小型の船で入り江をめぐったり、砂浜に連れていってもらいます。

私たちは暖かく、優しい黒海の波を浴び、太陽の光を浴び、幸せと喜びにひたっています。（中略）

私達のグループでは平和の日を祝いました。私達は平和について、平和な空について、幸せな幼年時代について、色々な国の人達の間の素晴らしい友情について話しました。私達は人々が仲良くし、互いに愛し合うことがどんなに大切なことか、そうすれば地球上の子ども達の平和と幸せを破壊するものはだれも、どこにもいないということを話しました。人生で一番大切なもの、それは平和です。（後略）

1999 年の素晴らしい夏をありがとうございました。　　さようなら

’99.8.9　　ニーナ

（注）この手紙は「救援・中部金沢」の東しげのさん達とニーナさん達の交流の１コマです。事故処理作業者協会の子ども達（20 名）も、1 月 9 日、ミルゴロドのサナトリウムに出発しました。素敵な想い出を残してくれますように！

'99 スタディ・ツアー特集（第３弾）

私のウクライナ記

大島 弘美

ウクライナという国は、とても豊かな国だと思いました。どこまでも続く畑、キノコがいっぱいの森、とにかく広い村の家々には、りんご・プルーン・ぶどうがいっぱい。にわとりやアヒルが道をうろうろ、屋根付きのかわいらしい井戸。「こんな村に住めたらすてきだなー」と思いながら、バスにゆられました。道はがたがた、ゆれるバス。

今回の旅行は本当に素晴らしかった。何だか今でも夢のよう。が、やはりこの国は確かに過酷な運命を背負っているのです。

被曝した消防士さん達の印象は慢性的にだるそうで、とても私はショックでした。

中でも一番記憶に残るのは、ゼレムリャ（移住者の村）でのことです。その村はとても広々としていて、他の村のように果物があまり実っていませんでした。それでもルンルン気分の私は、村で一軒の国営の雑貨店で、ビスケット・ウオッカなど買い物を楽しんでいました。そこへ、日本人の一行がめずらしいので目立ったのでしょう、一人の婦人が来て、「私は息子を亡くして悲しみに暮れています。あなた方の国の宗教はどんな救いの教えをもっているのか、本などあれば教えてほしい。」と訴えられました。私はその時、頭が真っ白で何も考えることができませんでした。被曝で息子を亡くした人の現実が、目の前にあったのです。たぶん彼女はそのつらさからの救いを求めたのだと思います。が、私に慰めの言葉はみつかりません。今思い出しても胸が痛みます。

こんなに美しい豊かな土地が、被曝・汚染されているこの現実を、私達人間は見続けなくては…。現実はあまりにむごく、目をそむけたくなるけれど。

私が行った時の市場には、肉や野菜、日用品などがいっぱい。２、３年ぐらい前にはこんなに品物がなかったそうです。

“たべもの”が豊かな国は強い。これが私のウクライナの感想です。

ＰＳ．特においしかったのはじゃがいもとスイカ。ボルシチとウファ（魚のスープ）はもう絶品！

＜国営の雑貨店のおばさん（左から３人目）の家で。
中央が大島さん（ゼレムリャ村にて）＞

＜スタディーツアー感想＞　　田中 良明

今回のスタディーツアーは、私にとっては、97 年に次いで 2 回目のウクライナ訪問でした。それだけに慣れがあり、現地にたくさんの知り合いがおり、さらに、今回は見聞・交流を深めることが目的だったこともあり、全体的には、楽でたのしいツアーでした（リラックスしすぎた失敗もありましたが）。

私にとって、今回のツアーの第一の目的は、チェルノブイリ原発の見学でした。事故を起こした 4 号炉を覆う石棺は、私が予想していたよりもしっかりしており、窓のない無機質な巨大構造物という感じで、正直なところ劇的な印象は受けませんでした。原発見学で一番印象に残ったのは、放射線検知機が発する「ピッ、ピッ」という音で、原発に近づくにつれ、音の出る間隔が短くなっていくのにはいいしれぬ圧迫感を感じました。

その後に寄った無人の街プリピャチは、雑草が茂り、かつての人びとの生活の跡を感じることは困難でした。プリピャチの現状は、事故から 13 年が経ち、さまざまな爪痕を残しつつも、あの事故が日常性のなかに埋没しつつあるウクライナの現実の一面を示しているように思えました。

事故の爪痕の中で今に残る最大のものは、放射線被曝による障害です。放射線障害は経年的に障害が進行します。事故処理作業に従事した消防士に対する聞き取り調査においても、それは明白に現れていました。そして、汚染地区の森林火災の消火活動にあたる消防士は、地表や樹木のなかから、火災によって大気中に放散される放射性物質によって、今なお新たに被曝していることを知りました。

「チェルノブイリは終わらない。」　この思いを、もう一度噛みしめた訪問でした。

プリピャチ
――十三年前に死んだ町

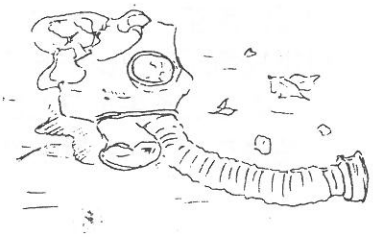
橋本京子

音のない町だった
初秋の涼やかな風が吹いているのに
色づきはじめた樹木や
ぼうぼうと伸びた雑草を渡る風の音は聞こえない
通訳のアンドレイの声も放射線測定器の音も
確かに聞こえてはいるのだが
発せられるそばから町に吸い込まれて行く

黄色の大観覧車が一度も回ることなく
うろこ雲が浮かぶ広すぎる空に立っている
赤　青　緑のゴーカートのハンドルは
誰にも握られることなく錆びついてしまった
十三年前の五月一日にオープンするはずだった遊園地に
子ども達の歓声の幻聴すらありえない

一九八六年四月二十六日　午前一時二十三分
チェルノブイリ原発四号炉で爆発が起きた
そこから一番近い　人口四万五千人の原発労働者の町　プリピャチ
翌日午後二時になって　千二百台のバスで全員が避難した
「三日間の予定で」「着の身着のままで」
しかし誰ひとり二度と帰ることはなかった

ウクライナから戻って十六日後　東海村で臨界事故が起きた



竹内さんのウクライナ便り

（チェルノブイリ救援・中部　キエフ駐在　竹内高明）

・10月1日現在のウクライナの人口は4,980万人（国家統計委員会発表）。1月1日時点の5,010万人より30万人減少。キエフ市の10月1日現在の人口は263万人。
（『日々新聞』11月20日号）

・４号炉（石棺）の屋根を支えている梁の強化作業が始まった。資金は主に外国の援助による。今年1月～10月の原発による発電量は、606億3,000万ｷﾛﾜｯﾄ時。全発電量の43.7%。ロシアからの核燃料調達が遅れたため（理由は資金不足）。発電量は予定よりも2億ｸﾞﾘﾌﾞﾅ分少なかった。（『日々新聞』11月27日号）

・'98年のウクライナの出生率は、1,000人あたり8.3人。出生総数は41万9,200人で、'97年より2万3,400人少ない。血液病・造血器官病の罹病率は11.2%増加。これは環境汚染の影響と考えられる。（環境保護・原子力安全省の発表）（同上）

ｸﾞﾘﾌﾞﾅのﾚｰﾄは、一時1ﾄﾞﾙ=5.5ｸﾞﾘﾌﾞﾅにまでなっていましたが、12月12日現在、1ﾄﾞﾙ=5.1～5.2ｸﾞﾘﾌﾞﾅです。しかし、このドル高に伴い、物価が上がりつつあります。キエフの知人の話では、風邪がはやると、薬局ではまず安いウクライナ製の薬が売り切れてしまい、割高の輸入薬を買えない人は泣き寝入りするのだそうです。

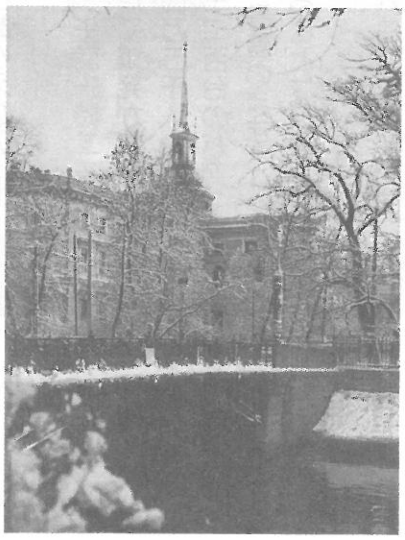
・「石棺」補修計画実現のためには、7億8,000万ﾄﾞﾙが必要と言われているが、そのうち現在調達可能なのは4億ﾄﾞﾙのみ。2000年5月に、補修工事資金提供者を新たに参入させるための国際会議が、Ｇ７諸国より企画されているが、チェルノブイリ原発３号機運転停止の最終的な日取りが決まらない限り、会議の成功は望めないだろうと考えられている。（『ｲｽﾞﾌﾞｪｽﾁｬ･ｳｸﾗｲﾅ版』12月24日号）

大統領により指名され、議会で承認された新首相ユシェンコ氏は、'93年1月からウクライナ国立銀行頭取の職にあった人で、エコノミストとしての力量には定評がありますが、政治的には未知数です。

コヴァレフスカヤさん、ニーナ・シヴァノヴァさんより、新年のご挨拶を伝えてほしいとのことです。

大学では1月から試験期間に入り、1月20日～31日くらいが冬休みです。先日送っていただいた読売新聞のコラム(9ページ参照)の中にある詩の引用は、私がウクライナ語から訳したものをそのまま使っていただいています。ジトーミル州消防局一階のチェルノブイリ犠牲者記念プレートのわきに掲げられている詩です。

このところキエフとしては妙に暖かい天気が続き、一時積もっていた雪もすっかりとけてしまいました。



＜読売新聞／編集手帳（1999年11月1日朝刊）より＞

「チェルノブイリの風が心に吹いてくる。チェルノブイリのほこりが土地に降りかかる…。」ウクライナのジトーミル州消防局のホールで見た詩だ。

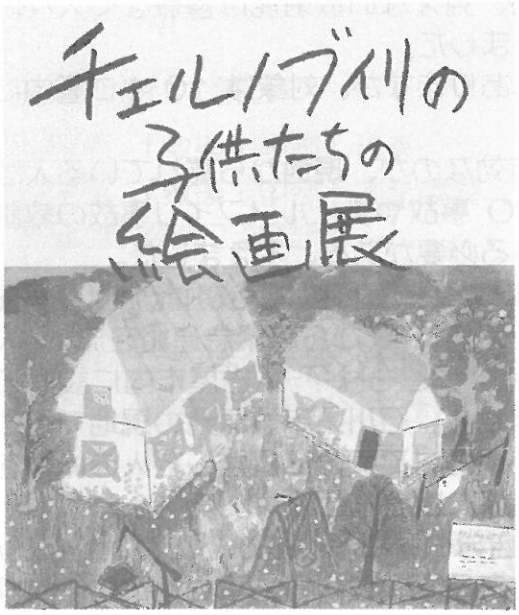
10月中旬に訪ねたジトーミル市は、チェルノブイリの南西80キロ。86年の原発事故で、州の75%が放射能に汚染され、735の町や村が無人のままだ。消防局長のアントニュークさんは「事故は今も続いている」という。

アントニュークさん自身、事故当時、志願してゴム製の防護服を身につけただけで、炉の真下にある冷却水プールの水を抜き取る作業を何日も続けた。当時の仲間で健康な者は一人もいないという。

がんが多く、アントニュークさんも心臓が悪い。州の人口150万人の3分の1が被災し、うち18万人が児童だ。障害者と認定された人は6,000人もいる。罹病率は86年と比べて4倍にもなる。

州議会議長のボイテンコさんは「それでも原発なしでは国の発展は不可能」と言う。茨城県東海村で起きた国内初の「臨界事故」に、「チェルノブイリも人間の不注意が原因だった。大変憂慮している」と顔を曇らせた。

冒頭の詩は「人生の時はとどまることなく過ぎていくが、われわれの記憶は消えることがない」と続く。東海村の事故もまた記憶から消してはなるまい。



＜「孤独な鳥」作者:アレクサンダー・ヤコヴェンコ10歳＞

この絵画展の様式をそのままお借りして、各地で絵画展を開くことができます。お問い合わせは、「救援・中部」の事務所までどうぞ。（京）

浜松を中心とした、Y2K・ピースコネクションのグループが、チェルノブイリの子ども達の絵画展を、浜松駅前で開催しました。

メンバーの一人は、フォトデザイナーとあって、写真の通り斬新で印象深い絵画展となりました。

赤い木製の箱の中の、その周りの土の中から、子ども達が描いた事故のときの様子、打ち捨てられた愛する我が家・村々、病気の友達などの絵が、この絵画展を見た人の心に深く訴えるものがあったことと思います。

＜浜松駅前で開催された絵画展の風景＞

放射能測定器のネットワークを作りませんか?

前号ポレーシェで、“放射能測定器は原子力時代に生きる私たちの必需品”と宣伝したところ、読者の皆様よりお問い合わせが続きました。東海村事故の記憶も生々しく、自分の身は自分で守らなければならないという悲しい現実。行政や電力会社を信頼できない日本では、原発が動いている限り、こんな対策も必要なのではないでしょうか。特に原発現地ではより深刻な問題です。

そこで放射能測定器をお持ちの方、あるいはこれから持とうとされる方、いざという時のため、測定値を連絡しあい、もし事故が起き、放射能が町に流れ出した時、いち早く対策を取れるようネットワークを作りませんか。ファックス、電話、インターネット等で知恵を寄せ合って相談できたらと思います。(もちろん、原発が止まりこんなことをしなくてもよい日が来ることを祈りつつ。)

関心のある方、測定器(どちらの製品でも)をお持ちの方、放射能測定器購入を希望の方、事務所までご連絡ください。

原子力災害から身を守る自主防災訓練(来る 4/23(日))
「放射能から逃げられるか?」に参加しませんか?

もし原子力災害が起きた場合、果たして私たちは逃げられるのか、甚だ不安です。国や電力会社は“日本では原発事故は起きない”“避難する事態は起こらない”と言ってきたわけですが、一たび放射能が漏れた時、見えない放射能は容赦なく人々におそいかかることが、東海村ＪＣＯ事故でわかりました。

原発現地では行政が防災訓練を行うところもありますが、対象は 10 キロ圏内に限定されています。

そこで、行政サイドの防災訓練が果たして有効なのか、現地から離れている人は関係ないと思っているのではないか、東海村 JCO 事故やチェルノブイリ事故の教訓を生かし、市民サイドの自主防災訓練をやってみる必要があると考えました。

４月 23 日(日)朝、中部電力浜岡原発で事故発生と想定し、放射能流出量、風向きなどをシミュレーションし、放射能測定器ネットワークからの緊急連絡を流し、人々は何を持って、どのように逃げるのか、その時、子どもは? 名古屋市内に設ける避難所の設営・救護班の編成等も考えねばなりません。石川県志賀原発の現地で行われた市民による自主防災訓練なども参考に、また東海村で実際に避難した人の体験を聞いたりして、市民サイドのより現実的な防災訓練にしたいと思います。

原発が 50 基以上も稼働中の日本では、いつ自分の身にふりかかるかわかりません。(もちろん、こんな問題を引き起こす可能性のある原発を一日も早く止めなければなりませんが)

チェルノブイリ事故 14 年に近い４／23(日)の一日、放射能被災を我が事として考えたいと思います。浜岡・豊橋・名古屋・岐阜・三重と広く参加を募ります。

原子力防災市民ネットワーク　連絡先(昼)052-971-8372　早川
(夜)052-734-0901　丸山

連載16　いまだに続く------チェルノブイリ閉鎖地域の汚染

調査地点		放射能レベル (ピコキュリー/リットル)	
		ストロンチウム90	セシウム137
地下水	ヤニフ駅	110.0	1.6～2.8
	原発冷却水池	64～200	1.6～5.6
	第三紀の水 (古代の水)	0.4	＜1.0
	配水管ネットワーク	0.3～1.8	0.3~0.8
表層水	プリピアチ川	5.1~8.9	3.0～6.0
	原発冷却水池	55~60	64～75
	ジモフィシュチェ湖	210～490	33～54
	グリボク湖	2900	356
汚染水排水路	ウズ川へ (チェルノブイリ町)	6.4	19.0
	キエフダム湖へ (ゼレニイ・ミス町)	1.9	4.5
	原発冷却水池へ	75.0	57.0

(調査1996年12月ウクライナ政府による)

事故から14年目に入るチェルノブイリ原発の立ち入り禁止区域（いわゆるゾーン）内の環境は今でも深刻な放射能汚染が続いている。汚染物質の中でも半減期が約30年のセシウム137とストロンチウム90は大きな汚染源である。

汚染した地表から浸透した水で地下水にまで汚染が拡大し、地表を流れる雨水で川や湖の水が強烈に汚染している様子が左の表で見て取れる。汚染のレベルがどれほどかは、化石年代の水（第三紀）と比較すれば良く分かる。かつてはどこもこうしたきれいな水でいっぱいだったチェルノブイリ地区、42000人の原発関連住民の町プリピアチ地区は、今ではいつ回復するとも知れない汚染の町、無人地帯である。

汚染地帯に降った雨によって、放射能はプリピアチ川を通じ下流の首都キエフに達して260万人の命をつなぐ飲み水を汚染する。長期的には大きな問題である。以前にも書いたがゾーンの中は無人となって野生動物の天国である。動物達は汚染した植物を食べ、汚染した水を飲む。調査によれば、猪の肉は季節にもよるが、1Kg当たり478.4～101493　ベクレル、ノロ鹿の肉は666.3～273450ベクレルの放射能で汚染されている。サマショーロと呼ばれる、避難先から汚染地域に戻って暮らしている人々はこうした環境で生きている。

（河田）

ふりいとーく

『心の支援』

（岡崎市　M.S.さん）

もうずっとポレーシェの読者でありながら、私はクリスマスカード作りと、粉ミルク支援へのささやかなかかわりしか持ってこられなかった。でもそんな細々としたかかわりであっても、チェル救とつながってこられたことがうれしい。心を病む身となってしまった今、私はチェルノブイリへの支援は、強者からのほどこしではなく、同じ地球市民として心と心の手を取り合うことで、ともに生かされていくことなのだと思うようになった。

今私は、若い子ども達に「クリスマスカードを作ろう」と呼びかけている。そして「原子力とともに生きなければならない自分達の命についても考えよう。」と語りかける。援助とは与えるものではなく、自分の心を育てるものだと思う。若い子ども達のしなやかさに私は期待している。

チェルノブイリを考えることは、今の自分の足元を見直すことでもあろう。原発大国である日本、例えば台湾へ原発を売る日本は、核輸出国でもある。日本が、世界を放射能で震えあがらせる日が来ないとはいえない。「私達の豊かな生活が、そんな危険とともにある」という悲しみを、私達は忘れてはいけないと思う。「ノーモア広島」と叫ぶ日本人が、なぜ地球人として「ノーモアチェルノブイリ」と言えないのか。

私たち大人がしなければいけないことは、そんな今の日本をよりよいものにしていくため監視しつづけること、そして核の悲しみを「未来の大人達」に語り続けていくことだろう。

＜事務局だより＞

11 月 27 日　岐阜市の長良養護学校の金華祭にお招きいただきました。ハート to ハートをテーマにして、生徒みんなが参加した発表会でした。＜かっぱちゃんのたび＞という劇には、ベッドごと出演の子もいたり。それがとても自然で、楽しく見させていただきました。この場で今年二度目のチェルノブイリの子供たちへのカンパ 7,000 円余を贈られました。

12 月　救援金・ミルク代・維持会費などの寄付がこの月だけで 200 件を超えました。＜領収書不要＞の方には、心ならずもお礼状を省略させていただいていますが、この場をかりてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

2000 年 1 月　穏やかに明けたこの年。チェルノブイリの人々にも心なぐさむことの少しでもあるように、気持ちを新たにしています。皆様、今年もどうぞよろしく。　＜松田＞

編集後記

☆「原子力防災を考える市民ネットワーク」が、4 月 23 日(日)の「自主防災訓練」に向けて動き出した。原発現地の人たちの「放射能と隣合わせのつらさ」に、どこまで寄り添えるのか…自分への重い課題。（京）

☆年明けにピアスの穴をあけた。これで私の今年の運は、きっと開けることでしょう。（かよ）

☆初めて遊びに来て「神田川」が流れてきそうなアパートでイラストを描いています。（勝）

☆ポレーシェの購読者で、ジトーミルの方と文通しているという女性と出会った。事務所に招待し、早速編集を手伝ってもらう。これからもどうぞよろしく!!（美）

☆住民投票のパワーに、「官・財」と癒着した政治家達が慌てている。「吉野川可動堰反対」の住民投票を、「誤作動だ」とわめいた某建設大臣！　誤作動しているのはあなた達だ。（J）